

Title	ワイマール期の大学人の政治活動
Author(s)	布施, 俊夫
Citation	大阪外国語大学学報. 38 p.63-p.77
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80608
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ワイマール期の大学人の政治活動

布 施 俊 夫

“Die politischen Bewegungen der deutschen Akademiker in der Weimarer Zeit”

Toshio FUSE

Der Zeitraum zwischen dem Beginn des Ersten Weltkriegs und dem letzten Stadium der Weimarer Republik ist durch die aktiven Reaktionen deutscher Hochschullehrer auf die realpolitischen Angelegenheiten gekennzeichnet. Es ist zwar kein politisches Ereignis zu finden, das unmittelbar auf ihre lebhaften politischen Bewegungen zurückzuführen ist, man darf aber nicht übersehen, dass der Zwiespalt zwischen deutschen Hochschullehrern, die eigentlich in einer festen Vereinigung überparteiisch und unabhängig von allen gesellschaftlichen Interessen eine führende Rolle in der Öffentlichkeit hätten spielen sollen, die Unruhe des politischen und sozialen Lebens während der Weimarer Zeit förderte und die Vorherrschaft der antidemokratischen Seite die Bewahrung des Weimarer Systems erschwerte und den Aufstieg des Nationalsozialismus vorbereitete.

Vor etwa 15 Jahren gab es noch sehr wenige wissenschaftliche Arbeiten in diesem Bereich. Aber seit der Mitte der 60er Jahre schenken immer mehr Zeitgeschichtler Aufmerksamkeit auf das politische Bewusstsein und die politischen Bewegungen deutscher Hochschullehrer in der Weimarer Zeit und sie haben bis heute schon einige bedeutende, sehr interessante Leistungen auf diesem Gebiet gebracht. Aufgrund dieser Leistungen wird in diesem kleinen Aufsatz der Prozess der politischen Bewegungen deutscher Hochschullehrer chronologisch dargestellt in Rücksicht auf zwei Fragen: “Warum ist der Zwiespalt zwischen ihnen nicht überwunden worden?” und “Warum konnten die Gemässigten, spätere verfassungstreue Hochschullehrer, nie Initiative ergreifen?”

第一次世界大戦からワイマール共和国にかけての時代はドイツの大学知識人が現実政治の問題に敏感に反応し、様々な政治活動を積極的に展開した時代である。これらの運動が何らかのはっきりした政治的变化を惹き起したという様な事件はないが、社会のオピニオン・リーダーであるべき彼等が常にまとまりを欠いて分裂抗争をくり返して社会の混乱を助長し、保守派の優勢をその対抗勢力が打ち破れなかったことがワイマール体制維持を困難にする一因となり、ナチスの登場を容易にする政治的地盤を作り上げて行ったという事は目立たないが見逃せない事実である。

この点に着目した研究はこれ迄殆んどなかったが、ここ数年来いくつか出て来た。学者の回想録類には政治活動に触れた部分は少なく、彼等の講義中の政治的発言などはあとに残りようもない等、資料の集まり難いテーマではあるが、当時の新聞や学者の手記、書簡などを集めて研究は着々と進んでいる。小論ではそれらの研究を基礎に第一次大戦からワイマール共和国時代にかけての大学人の政治活動を年代記風に組み立て、整理記述し、何故彼等にまとまった政治活動が出来なかったのか、どうして保守派の優勢を破ることが出来なかったのかを探ってみたい。記述の方法は次の順序に従う。Ⅰ．第一次世界大戦の時代、Ⅱ．ワイマール体制の成立からドーズ案受理に終る危機の時代まで、Ⅲ．相対安定期。第一次大戦の時代に触れるのは、この時代の大学人の活動がワイマール時代のそれと不可分につながっていると考えるからである。また相対安定期までに限る理由は、恐慌以降の動きはむしろナチス前史として別に扱った方がいいとの考えによる。表題にあげた大学人という言葉は広義に解釈するば当然学生をも含み得るが、ここでは大学教官の政治活動を中心に扱いたい。それは Eschenburg が屢々指摘している様にこの時代は大学教官、特に教授達に帝政時代程ではないにしても、まだ大きな権威があった時代であり、彼等が学生だけでなく、全国民の教育者・指導者を自任して活動の中心になっているからである。学生の動きが表面に出て来るのは主に末期、ナチス学生同盟 (NSDStB) などという純粹の政治団体が確立された頃からと考えてよかろう。

Ⅰ

第一次大戦開戦期の国民的熱狂の中で多数の大学教授達はドイツの正当性を主張し、戦意昂揚につくす戦争宣伝文書を書き、無数の講演会で熱烈な喝采をあげた。この活動の特徴は、それが決して一部の偏狭な愛国者の行為だったのではなく、Otto von Gierke, Werner Sombart, Max Scheler 等それぞれの学問領域の権威者であった人々を含んでいたこと、この活動が決して委託されたものでなく、純粹に自発的なものだったことである。Ernst Troeltsch でさえこの時期には西欧民主制の合理的自然法に対するドイツの、浪漫主義に由来する理念の絶対的な優越性を説いている。尤もこれは西欧側でも同じで、ベルグソンやバーナード・ショウも他の多くの知識人と共にドイツをヨーロッパの平和攪乱者として誹謗し、自分の側の正当性を主張しているのである。²⁾とに角開戦期にはドイツの大学人が少数の例外を除いて戦争支持の姿勢をとったことは、³⁾「我々の信念は、全ヨーロッパの文化にとっての幸せはドイツ軍国主義が勝ちとるであろう勝利にかかっているという事である」という内容の、1914年10月に出た「ドイツ帝国の大学教官の宣言」に3016名の、実に全教官の四分の三の署名が得られたことから明らかであろう。

大学人の政治活動に初めてはっきりした分裂が生じたのは1915年6月帝国首脳部宛に提出された「知識人の請願」とそれに対する「反対請願」による。前者はベルギーのドイツ保護領化、フランス隣接地帯の分割、ロシア隣接地帯の併合等最大限の併合・支配を主張するものであり、内容は5月に六大経済団体から出された請願とほぼ一致する。後者はこの馬鹿げた請願が国民の声

と見られるのを避ける為に出された。しかしこの反対請願が独立国民の併合にはきびしく反対しながら、同時にドイツの戦略的、政治的、経済的利益を満足させる講和を求めて、西側への侵略にのみ反対して、バルト諸国やポーランドのロシアからの解放にはむしろ暗に賛成している様なあいまいさには、開戦の熱狂のほとぼりのいまださめやらぬドイツでこの反対請願に出来るだけ多くの支持者を得ようとした配慮によることも確かであろうが、この請願を起草したベルリンの歴史学者 Hans Delbrück を中心とする *Mittwochabend*（水曜夕べの談話サークル）にドイツの拡大、併合政策を完全には捨て切れない体質があった事をうかがわせる。こうした歯切れの悪い反対請願でも141の同意宣言しか得られず、大学教官はその半数しかなかった。これに対して最大限の併合を求める知識人の請願には1347の署名が集まり、うち352が大学人であった³⁾。つまり大学教官の十分の一近くは全ドイツ主義的戦争目的の支持者であった訳である。反対請願グループは「穏健派」、知識人の請願グループは「併合主義者」と呼ばれる。尤もこの時には Hans Delbrück と Alfred Weber が知識人の請願派にベルギー併合を放棄して重点を東方に移した共同運動を起すことを申し入れた事が知られており、¹⁾ 両派の話し合いが可能であった事から分裂は未だ決定的でなかったと言える。

1916年にドイツの戦局が海でも陸でもゆきづまって包囲状態に陥り社会民主党・進歩人民党・中央党等議会多数派が協調講和を唱えて、あくまで戦勝講和を主張する政府及び軍部首脳に対立し始めた時、イギリスの海上支配を打ち破るべく軍首脳部から持ち出されて来たのが無制限潜水艦作戦であり、そしてこれにいち早く支持を表明したのが併合主義者のグループであった。ベルリンの歴史学者 Dietrich Schäfer をリーダーとするこのグループは全ドイツ協会と協力し、無制限潜水艦作戦実施の大衆請願運動を展開し、皇帝宛三万、国会宛九万の署名を得た。穏健派は勿論この作戦に反対であり、前年は自ら連帯を申し入れた Delbrück もこの期に及んでは統一運動が不可能であることを認め、自分の弟子のベルリン大学私講師 Martin Hobohmを中心に調査機関を作って全ドイツ主義者達の煽動文書と国外での活動が如何にドイツにマイナスになっているかについての資料を蒐集して反撃に出ようとしたが、攻撃の開始が遅れた事と世論が圧倒的に潜水作戦支持に傾いていた為に効果はなかった。

1917年2月のロシア二月革命の影響下でドイツでも市民の急進化が進み、プロシヤ三級選挙法の民主化要求運動が始まると、これまで戦争目的論をめぐって起っていた両派の対立に国内問題からみ、もともとは超党派的に利害の調停をする、国民の真の政治的オピニオンリーダーをもって任じていた大学教授のグループに次第に政党色が濃くにじみ出て来る。併合主義者は社会的な利害関係から自分達は自由だと思いつつ、全ドイツ協会、重工業、農場経営者と結んで、保守党・国民自由党右派の側に立っており、プロシヤ選挙法改正には勿論反対であった。穏健派も選挙法の民主化には賛成していたものの、議会制採用を求めたのは Max と Alfred Weber、

Gerhard Anschütz, Lujo Brentano, Hugo Preuß, Walter Schücking くらいで、グループ全体としては進歩人民党を最大の盟友と考え、帝国（自由保守）党、国民自由党左派とは連帯を望むが、中央党に対しては既に慎重になるという程度の君主主義的体質であった。彼等が選挙法改正アピールに署名したのは、この譲歩によって左翼の進出をくい止めようとしたために他ならない。1917 年秋になって多数派社会党に協力を求めたのも大衆の急進化を顧慮してのことであって消極的であった。

国内問題がからんで対立が深まった大学人の両グループの関係が完全な決裂に至ったのは 1917 年 7 月の帝国議会の平和決議をめぐる抗争によってである。7 月 6 日のエルツベルガーの演説をもとに出された、議会は 8 月 4 日（開戦の日）の政策、すなわち純粹の防衛戦へ立ち帰り、諸国民と国境部分を強制的に抑圧しない調停の平和のために努力するという平和決議⁵⁾は当然国民に「勝利の平和、か」「無賠償無併合の諒解講和、か」の議論をまき起した。大学人の平和決議抗議声明は大学教授の三分の一に近い、1100 名の署名を得たが、この成功の原因はこの声明の内容が戦争目的論に触れる事を避けて、平和決議を出した議会は任期が切れているので（国民議会は三年毎に選挙が行われて来たが、1912 年以降選挙が行われていない）、民意表明の資格なしと主張した事と全ゆる政党の見解に影響されず、全ゆる種類の特殊利害にも関係なく、ただ祖国の将来を深く憂える気持ちに満たされて抗議すると大学教授の超党派的な任務の自覚に訴えた事にある。穩健派はこの抗議声明がドイツの大学の威信を失墜させるのを恐れ、まるで大学が国会と対決して、全ドイツ主義者の権力政治のプログラムを引き受けるかの如き印象を払拭しようと Delbrück を中心に 反対声明を企画し、全国各大学から署名を集めようとしたが、結局ベルリン大学の 49 教授の署名を得たにとどまった⁶⁾。平和決議に対する特記すべき反応は 1917 年秋の「祖国党」とそれに対応して作られた「自由と祖国のための国民同盟」の設立である。この二団体が大战中世論を二分した「戦勝講和—帝政維持」対「諒解講和—国内改革」という対立思想から生れた最後の団体であり、併合主義大学人は祖国党に、穩健派教授は国民同盟に結びついたのは勿論である。しかし前者が全ドイツ協会を中心に愛国的な団体の加盟を得て、1918 年 3 月に 45 万人、7 月には 125 万人と着々と党員数を増やし、大企業から潤沢な資金を得て、シャイデマン—エルツベルガーの諒解講和を戦争放棄講和だと平和決議反対の大規模なアジ運動を展開したのに対して、国民同盟は資金も乏しく、その上戦争目的に関して諒解講和は求めるが、戦争放棄講和には反対などという戦争初期の併合問題についてのあいまいな考えが尾をひいた意見の不一致があつて不振であった。

最後にこの二つの党派、併合主義グループ（戦勝講和派）と穩健派グループ（諒解講和派）に属さない大学人の事に触れておかねばならない。この両派に属した大学人同様政治問題に強い関心を持っていた人々に少数の平和主義者とごく数少ないマルクス主義者があつた。平和主義者と

穏健派の間には 1915 年の反対請願の際出来るだけ多くの署名を集めるべく同盟関係が出来、以降もこの戦術的協力は併合主義者に対して穏健派が常に劣勢にあった為続いてはいたが、国民自由党に近く、政治形態に関しては議会民主制よりも君主政体を支持する者が多く、戦争目的論でも東部領土の併合構想を捨て切れなかった穏健派と平和主義者の間には相容れぬものがあった。平和主義の代表的人物は Friedrich Wilhelm Foerster, Georg Friedrich Nicolai, Wilhelm Kaufmann それに反対請願に署名するなど穏健派に近かった人々として Albert Einstein, Max Lehmann, Walter Schücking がある。その他の併合、穏健両陣営に属さない大半の大学人の政治意識はよく分らないが、1914 年の「ドイツ帝国の大学教官の宣言」に 3016 名の署名が集まったこと、1917 年の「平和決議抗議声明」に 1100 名の署名があったことから、態度をどちらかに決めねばならぬ場合には併合派につく人が多かったと言えるであろうし、両派が対立した時、ある機会には併合派の、別の機会には穏健派の声明に署名するといった人は僅か 11 名⁷⁾しかなく、彼等も一定の政治的体質を持っていたことがうかがえる。

II

ドイツの戦況が絶望的となり、連合国との講和交渉に入るために 1918 年 10 月に宰相の座についたマックス・フォン・バーデン公は大戦中穏健派の中心グループであった **Mittwochabend** の一員であった。新宰相の私設評議会をもって任ずる **Mittwochabend** サークルがマックスに、ドイツには休戦の要請に屈辱の条件がつけられた場合には徹底抗戦の覚悟があることを盛り込む様に進言し、また戦後の連合政府は右派を含む全政党で構成しなければならない、さもなければ左翼が右派の威信をつぶしてしまうであろう、ドイツの将来への期待がかけられるのは右派だけであると忠告した事はこのサークルの人々の政治意識を明らかにするものである。こういう意識は併合主義者にはもっと強くあったであろうが、戦争直後は対立が抑制され、ドイツの大学全てが新国家への協力に同意し、とに角議会民主制を盛り立てて敗戦ドイツの威信の維持に努めようとしたのであった。1918 年 11 月 20 日のベルリン大学の教官集会では穏健派が初めて一時的多数派になった（1915 年の知識人の請願の際、発議委員会の委員長であった **Reinhold Seeberg** がベルリン大学長として人民代表委員会政府に忠誠宣言をする皮肉な一幕もあった⁸⁾）。

新国家支持でまとまった大学人の統一が再び破れ、対立抗争が決定的になったきっかけはヴェルサイユ条約受理であろうが、分裂は既に国民議会・選挙への過程で始まっている。ドイツ保守党・国民自由党右派等を母体に形成されたドイツ国家人民党を支持する学者グループ「ドイツ国家人民派大学教師の委員会」が 1919 年 1 月に出来、そのメンバーの三分の二が大戦中の併合主義者から成っていたこと、穏健派が大抵 1918 年 11 月に進歩人民党・国民自由党左派から編成された民主党に入ったこと、そして前者が国際的な方向をとる民主党とは距離をおくと声明したり、後者が国家人民党は祖国党そのものだとののしったりしたことから、大戦中の分裂がそのままワイマール時代に持ち込まれた事がわかる。この場合も国家人民派大学教師の委員会がいち早く 1

1919年1月中旬に国家人民党支持、七首伝説等を使つての敗戦の罪の社会民主党への押し付け等を盛り込んだ声明を出し、6月には「国民の精神生活のリーダーたらんとするサークルは、その要求を実現したければ、こんな最大の恥辱の時に黙ってはいけ⁹⁾ないのだ」(Eduard Meyer)と述べて、「大学教師の皇帝引渡し反対宣言」を出して300名の大学教師の署名のほか、高校教師、聖職者、法律家、医師から農場主にいたる巾広い層の支持を受けるなど着々と実績をあげていったのに対して、穏健派の活動が Meinecke, Baumgarten, Troeltsch, Brentano 等の批判・抗議はあったものの、組織としてまとまらず個別的なものにとどまって充分に対応できなかった事は保守派に常に先手をとられる大戦中のパターンの繰り返しであった。

戦後の保守陣営には二つのグループがある。一つは旧ナショナリズムと呼ばれるグループで旧帝国の復活とヴェルサイユ条約履行反対を目指す。彼等の権力国家思想、政党国家蔑視はヴィルヘルム時代に源を持つ。最盛期は既に過ぎているが、ワイマール時代にも国家人民党と結んで反民主運動を続ける。上述の「国家人民派大学教師の委員会」は勿論このグループに属し、メンバーの大半が旧帝国時代に教授になった世代である。これに対して国粹的概念を持つネオナショナリズムのグループは「保守革命」とも呼ばれ、君主国の終焉をみとめ、ヴィルヘルム主義を物質主義、小市民主義と排斥し、新しい人間性への転向を重視する精神運動を目指す。彼等の理想とするのは第一次大戦開戦期の全国民が一体となった愛国的熱狂である。旧ナショナリズムグループとは世代も異なる。ワイマール時代のナショナリスティックな思想のダイナミズムはネオナショナリズムから主に出て来る。大学教師間での中心機関は「政治学院」であるが、これはベルリンの Moeller van den Bruck¹⁰⁾ をリーダーとするネオナショナリズムの中心グループ「六月クラブ」の人々、特に Herrfahrt と Martin Spahn の指導を受けていた。ネオナショナリズムは旧ナショナリズムのヴィルヘルム主義に反撥していたが、反共和国運動を展開していくうちに両者は合流して行く。新旧両ナショナリズムの共通の代表機関は1921年にヴェルツブルクに設立された、かつて指導的併合主義者の一人であった歴史学者 Georg von Below を名誉会長とする「ドイツ国家協会」である。¹¹⁾

1920年4月、カップー揆の後に初めてかつての穏健派グループの中から憲法に忠誠を誓う大学教師の声明を出そうという動きが出て来る。声明文の内容は、平和時には政治活動から離れているが、国家的激動や大事の際には犠牲をいとわぬ熱狂的活動の荷い手になって来たドイツの大学の伝統的使命をうたえて、同僚の超党派での国民的団結を呼びかけ、大学を「反動のとりで」と見る深い不信感が国民の中に広まりつつあるので、そういう不信をとくために無条件に、率直に民主的・共和主義的なワイマール憲法支持を表明しようとするものである。声明は更に新憲法には合法的に改正の出来る可能性がある事も指摘している。起草者達はこの指摘および国民的団結の呼びかけによって右派の大学人の支持も獲得しようとし、この声明を孤立したグループのものではなく、全大学教師による新国家憲法の公的支持声明として継続している分裂へのかけ橋にしようとしたが、矢張り保守派の署名はごく少数しか得られず、殆んど穏健派教官ばかり3

00名の、つまり全教官の十分の一強の署名にとどまった。そしてこの機会に「憲法に忠実な大学教師の同盟」、つまり理性の共和主義者の団体の設立も呼びかけられたが（4月26、27日）、具体的な反応はなかった。

第一次大戦中の穏健派の中心は *Mittwochabend* サークルであったが、*Delbrück* が11月革命で深い挫折を覚えて積極的に政治活動をする気力を失っていたし、大銀行家や大実業家（ハンブルクの銀行家 *Max M. Warburg*、電気工業主 *Carl Friedrich von Siemens*、*Robert Bosch* 等）と結びつきのあるこのサークルにはもはや戦時中の様な政治的効果も果せなくなった。それに代ってワイマール時代に理性の共和主義グループの中心になるのは *Meinecke* の *Spaziergang*（散策サークル）である。このサークルももともとは開戦直後の興奮した雰囲気の中で生れ、1943年まで主に *Meinecke* がつれて来た色々なメンバーが隔週日曜日に散策しながら、アクチュアルな政治テーマを論ずるものであった。大戦中の参加者は *Meinecke*、*Troeltsch*、*Alfred Weber*、経済学者の *Herkner* や神学者 *von Harnack* 等少数、ワイマール時代になると *Delbrück* もこれに加わり、*Groener* や *Rathenau* 等学者だけでなく、軍人や政治家も参加して広いサークルに育った。彼等は理性の共和主義グループの中心として共和国支持を公けに表明していたことは勿論であるが、ワイマール憲法が諸政党の混乱に対抗する力としてアメリカ式の大統領権限を規定しなかったことを不満に思っていた。だから1920年6月6日の総選挙でワイマール連合が大敗し（329議席から205議席に減少）、新政府をつくるのが難しくなった時、憲法を改正して任期の長い、出来れば終身の大統領の人民選挙を考えている。これは政党間の争いに動揺する新国家の安定を目指したものであるが、この構想は代理皇帝としての大統領統治制に他ならず（*Erdmann*¹²⁾ はこれを「立憲民主制」と呼んでいる、まして当時終身の大統領候補にバイエルンの *Ruprecht* 皇太子が考えられていたのだから、完全な君主制への逆行である。新共和国を支持しようと努めた人々の中でさえ、永らくその体制の中で生きて来た君主制への執着が如何に根強かったか、議会民主制の理解が如何に難かしかったかがここにも現われている。*Spaziergang* の中にある君主主義的体質の例をもう一つあげるならば、それは *Otto Hintze* が最初から熱心なメンバーとして加わっていたことである。この歴史学者はドイツがヨーロッパの中央部で自己を維持するためには強大な防衛組織を自由に駆使出来ねばならない。それが出来るのは強力な君主制だけだという熱心な立憲君主制擁護論者であった。

これらの政治活動に参加していない一般教官の政治的態度については、1920年代にチュービンゲン、ベルリン両大学で学生時代を送った *Eschenburg* の「1933年以前の大学生活から」に詳しい。彼は「大半の教授は、敵意までは持っていなかったが、非常な懐疑を持って民主制に対していた」と述べている。講義中の彼等の態度を見るに当っては、当時は奨学金など殆んどなく、学生の大半が高級官僚などブルジョア家庭の出身で、保守的・国民自由主義的な雰囲気の中で育って来ており、反民主的な空気が教室に満ちていた事を頭に入れておかねばならない。こうした教室の空気におもねる必要もない学問的権威者で、あからさまに共和国批判を口にする人は数

少なかったが（テュービンゲンの歴史学者 Johannes Haller, Adarbert Wahl；ベルリンの法学者 Martin Wolff），彼等の言葉によって学生達は自分達の考えが学問的に立証されたと考えた。この学問性とルサンチマンの結合は危険な現象であった。また権威のない、平凡な教師達の中から、学生の喝采を博さんものと彼等を真似る人々が出た事も考え合わせると彼等の影響は小さいとは言えない。こういう雰囲気の中で共和国支持の思想を持つ少数の教師達は非常に慎重な言動をしいられた。大半の講義では教授達が、まるで新制度が存在しないかの様に、可能な限りそれに触れずに中立の姿勢をとっていたが、それでも言葉の端々に君主制支持のうかがえる人が多かった、と Eschenburg は伝えている。¹⁴⁾ つまり大多数の教官は政治的には無関心で、共和制に積極的に反対もしないが、君主制になじんだ自分の考え方を清算する努力もしないという態度だった事がうかがえる。1922年の Vossische Zeitung の Erich Everth のアンケート調査の結果、それら一般教官の大多数の支持政党が右にも左にも偏さず、中庸で、新旧両方の流れの間でバランスをとっていて、何よりも社会的掛り合いの少ないドイツ人民党であった事¹⁵⁾がそれを証明している。

III

フランス軍のルール占領、それに続く大インフレーション、ヒトラーのミュンヘン一揆等ワイマール共和国を根底からゆさぶる事件の続いた1923年の危機の時代を経て、其後の景気上昇による内政、外交の緊張緩和の中で、漸く共和主義派の少数派も積極性を取戻す。1924年5月にドーズ案をめぐる議論が戦わされる中で行われた総選挙で、ドーズ案に反対する極右（国家人民党およびナチス）と極左（共産党）が大いに進出し、ワイマール連合、特に民主党が後退したため、共和派は主に大学教師、他に数名の作家（その中に Thomas Mann がいた）115名が署名した12月の選挙に向けての声明「民主主義支持の知識人」の中で、この選挙では民主党に投票するのが国民的義務だと呼びかけた。これに対して反民主派、ドイツ国家人民党系の大学教師もこの選挙が11月9日の精神とドイツに名誉と威信をもたらした伝統の精神の決戦を意味すると説いて、国家人民党のための選挙キャンペーンを展開した。この二つの声明、選挙運動は従来の大学教師の分裂の継続を表わしているに過ぎないが、共和派がこの運動の中で積極性を取戻し、自派の組織作りを始めた事が見逃せない。

先ず反民主派のことに触れておこう。結論から先に言うと、相対安定期には反民主派にそれ程目立った活動はなかった様である。Sontheimer はこの時代について次の様に述べている。「共和国が持ちこたえた14年の期間を考察すると、1929年から1933年までの最後の時期が疑いもなく反民主的精神活動が頂点に達した時期である。しかし1924年から1929年までの相対安定期に反民主運動が精神的に沈滞していたと考えるのは正しくない。Moeller van den Bruck の『第三帝国』（1923年初版）、Othmar Spann の『真の国家』（1921）、Edgar Jung の『劣等人の支配』（1927）、Spengler の『ドイツ帝国の新設』（1924）、Carl Schmitt の『議会制反

対の著者（1923）および「政治の概念について」（1928年初版）等の影響力の大きな著書はこの時期かその直前に生まれ、この時期に強く働きかけたのである。¹⁶⁾ つまり動揺の少ないこの時代に、反民主派の大学人達は、共和国に、民主政府に関与することに、外に向けての全ゆる履行政策、妥協政策に反対の姿勢をとり続けてはいたが、¹⁷⁾ 積極的に大きな反対運動は展開せず、専ら彼等の新理念を大衆、特に青少年に植えつける事に専念していたと言って間違いはないであろう。

共和派では、反ユダヤ主義的、国粹的な大学生の同盟 **Deutscher Hochschulring** が卒業生の会を持っているのに対抗して、共和派の大学教官とワイマール連合三党支持の卒業生達の団体「自由大学人の連合」を作る計画が立てられ、1925年10月に設立宣言が出る。内容は新ドイツの精神・社会生活形成の斗いの中で、大学教育を受けた市民が第一線に立ち、真理に権利を与え、大衆の精神を深め、国民に偉大な目標を遂行する情熱を起させ、諸民族の理解に役立たねばならないとして、大学出の階級の社会における指導的地位を強調し、この階級が精神的・政治的反動の中心になることを戒めるものであった。ワイマール連合三党の関係者に広く呼びかけており、事実8月のこの「連合」が主催した憲法記念式典にはライヒスバナーも代表を送っているが、実際にはこの運動の中心になっているのは民主党支持の人々であることは、この設立宣言の内容が1920年の共和国憲法支持声明とよく似ていることから容易に想像される。事実声明の署名者は民主党関係者が一番多く、社民党・中央党支持者のものは少なかった。そしてこの事が「連合」が目的の一つとしていた学生との連帯がうまく行かない原因になる。何故なら社会主義系の学生は既に「社会民主主義学生同盟」というサークルを持っていて、性格のあいまいな「連合」¹⁸⁾ には関心を寄せず、共和国支持の学生の間で分裂が起って了ったからである。

ベルリンの **Spaziergang** のメンバーはこの「自由大学人の連合」には加わらなかった。不参加の理由は **Meinecke** によれば、ドイツの大学教授はあまりにも個人的であるから、規約で定めた委員会をもつ様なきっちとした組織の中の一員にはなり切れないという事と共和派大学教師の同盟を作っても同僚の中に輪郭のはっきりした少数団体を作ったうだけで、そんなものは社会的ボイコットの全ゆる手段で何も出来ないものにされて了うという事であった。¹⁹⁾ 前の方の理由は隔週日曜日に不特定のメンバーと散策し、政治問題を論ずるという、永年続けてきた **Spaziergang** のわくにはまらない、自由なやり方の中に **Meinecke** が望ましい雰囲気を見出し、この方法でより良い大学教師の団結が得られるという見通しに裏づけられるものであろう。また **Anschütz** が平和主義・敗北主義の代表者が加わっているという理由で「自由と祖国のための国民同盟」²⁰⁾ に加わらなかったことや **Oncken** の政党議會制反対の理由による1920年の共和国憲法支持声明不参加なども脳裏をよぎったのかもしれない。後の理由については **Eschenburg** のチュービンゲンの学生時代の次の報告が参考になる。「私は当時一連の教授達の家に出入することが出来、²¹⁾

また学生自治会に所属していたおかげで教官の社交的な催しにも参加することが出来た。民主主義支持を表明した人、民主主義を肯定した人は、たとえそれがごくプライベートなサークルで行われたものであっても、広範囲の教授達にいかがわしい人物と見られた。人々はそういう人物とは出来るだけ個人的な接触を避けた。国民経済学者の Robert Wilbrandt という人物がいた。この人はおだやかな謙虚な人で、本質は非政治的な理想主義者であった。彼は自分の社会民主主義的な信念を誰にも押しつけなかったが、隠しもしなかった。この人物はボイコットされ、社会的に完全に孤立したのである。」²²⁾

「連合」には参加しなかった代り、Spaziergang は先ず自分達と政治的根本信念が一致しそうな人々に呼びかけてワイマールで集会を持つことにした。企画は小規模なもので、5, 60 人が人が予定され、100 通ばかりの招待状が出されて、1926 年 4 月 23, 24 日の集会には 64 名が出席した。これがワイマール会議で、ここで「憲法に忠実な大学教官の連合」が設立される。しかしこの名称に対して直ちにドイツ国家人民派の陣営から「憲法に対する忠誠は本来国家公務員としての教授には当然のことであるのに、こういう名称を使うことはそれに属さない教授達に憲法の敵という烙印を捺す意図があるのであらう」と抗議が出たし、学長会議でも「この名称はワイマールの催しに参加していない大学教官達から憲法への忠誠権が剥奪されるとの印象を与えかねない」との不満が出たため、後に (1931 年)「ワイマール・サークル」と改称された。この名称の方が知られているので、ここでは初めからこれを使うことにする。

ワイマール会議の意図の一つは共和国支持者の層をもっと広げることであった。会議での Meinecke の発言にもある通り、共和国支持者は自分のグループの孤立に悩んでいたのである。戦争中に生じ、革命の中で更に深まった大学人の分裂を解消して一本化し、大学を新国家の側につけるべく、彼等は先ず共和国保護法成立後政界で再三試みられた大連合構想に倣って、ドイツ人民党の支持者を味方に引き入れ、ワイマール・サークルの政党的構成をワイマール連合三党にこれを加えた四党連合にしようとした。これは成功して会議での三つの講演の一つは人民党の法学者 Wilhelm Kahl によって行われたし (あとの二つは Meinecke と Radbruch)、会議への人民党系の学者の出席もあった。しかし共和派のはっきりした少数グループの組織でなく、出来るだけ戦線を広げようとの意図のため、出席者の右から左までの同意を得ることが難しくなったことは確かである。「その人の政治的信条にかかわらず現在の民主的・共和的国家秩序の上に立って我々の憲法にもとづく生活の建設に積極的に協力する人全てを将来の公けの会議に歓迎する」という決議は当然問題がないと思われたのに、人民党系出席者が民主主義者・共和主義者と宣言することに反対したために難行した。結局これは採択されたが、決議を全大学に送って署名を求め、全大学教師のワイマール体制支持をとりつけようとの企ては彼等のワイマール・サークル脱退というおどしで阻止された。そしてこの署名中止の譲歩に対して Radbruch から抗議があり、今度

は Meinecke が自分が脱会するといっていさめねばならないという一幕もあった。²³⁾ 巾広く集まったワイマール・サークルを維持するためにはこの様な苦勞があったのである。

ワイマール会議のもう一つの意図はあくまで参加者の身分を拘束せず、政党色のはっきりした組織を作って参加者を社会的に孤立させるのを避けようということであった。そのためにこの団体は会員制でもなければ、規約も持たない、開放的な形のものであった。Meinecke の考えによるこのやり方は他の人々の賛同も得たようで、Kahl も会議での講演でワイマール・サークルは共和派教授の連盟をつくるどころか、超党派の党にまとまる努力もしないと述べ、方向を規定するのは憲法だけにしようと提案している。²⁴⁾ しかしこれによってワイマール・サークル参加者の孤立がどれ程避けられたかは疑問である。

ワイマール・サークルの政治理念は、サークルが右から左までの巾広い層を維持する事を第一目標とした為、当然あいまいなものになった。サークル全体の性格を規定する言葉として、民主主義とか共和主義という言葉が使われず「憲法への忠誠」(Verfassungstreue)という語が用いられている事も右派への譲歩をあらわすものである。つまり憲法に忠実な大学教師の影響力を一体となって高めるため、敗戦後の内外の政情からであれ、政治的信念からであれ、とも角新しい憲法を支持する大学教師がまともろうというのがその考え方であった。その際にもう一つの譲歩として、民主的国家秩序の是認が決して憲法改正を放棄した憲法への全面的同意にはならない事が同時に強調された。この右へばかりの譲歩の理由は勿論第一に新しく加わった人民党系の人々に対する顧慮であり、憲法支持層の輪をもっとその右まで広げて行こうとする意図から出たものであり、第二に社会民主党系の大学人の共和国支持の信念は絶対にゆるがないという確信にもとづいていたであろう。しかしまたワイマール・サークルの中心になっていた Spaziergang の人々自身の、憲法を改正して代理皇帝としての大統領制という構想をかつて抱いた事に表われている様な、ともすれば君主制に傾き勝ちな体質も作用していたと言えないであろうか。Meinecke がワイマール・サークルの目標としてかかげる「大学生生活の非政治化」という考え方にそれが出ている様に思える。大学生生活の非政治化とはつまり「全て公的生活の重要な機関になればならない国家に対する当然の、おだやかで望ましい関係」のことであり、彼はこれを更に敷衍して「国家支持の精神を詰め、運命が決めたあらゆる現存の国家に喜んで、確信をもって奉仕するのが大学生の教育者としての大学教師の最高の義務」²⁵⁾とまで述べている。国家形態がどのようなものであれ、国家そのものの安定、存続を重視するあまり、現存するものをそのまま受け入れて、とに角それに忠誠を誓おう、その中で国民的調和を取戻そうという考え方はまさに帝政時代の大学人の君主制支持の姿勢そのままであり、Radbruch からの批判を浴びたのも当然であった。

ワイマール・サークルがその国民的調和の理念から、保守派の本陣である国家人民党系の大学

人にも働きかけ、彼等をも新国家の地盤に引き入れようとする構想を持っていた事は当然である。しかし当面先ず人民党支持者のみに参加を呼びかけた為、保守派の指導的人物の一人 Georg von Below は「ワイマール・サークルの活動は保守陣営の切りくずしだ」と非難し、「現国家の強化には我々も全く賛成だが、民主憲法がその最大の障害なのだ」と述べている。²⁶⁾ この歩み寄りの余地のない強い対決の姿勢の中に大戦から持ち越された「併合主義者」と「穏健派」の対立が全然弱まっていないことが認められている。マルクス主義の側からの批判は更に痛烈である。ブレスラウの哲学者 Marck は「Vorwärts」紙上でワイマール・サークルの「共和国の仇敵」への譲歩を批判し、国家形態と国家を区別する様なあいまいな国家肯定は決然たる共和主義の大学人には何の役にも立たぬと述べ、²⁷⁾「国家支持の信念」に宣戦布告している。この立場からは右に向いたワイマール・サークルの橋渡し構想との了解はあり得ない。

1926年の会議は参加者64名という小規模な集会であったが、1927年の会議は前回会議の報告パンフレットを入手して、ワイマール・サークルに興味を示した大学教官1400名に招待状が出されるという、対象をずっと大きくした、公的な性格を持ったものであった。出席者は114名、1000通の招待状で64名の出席を得た第一回会議と比較すると随分の落ち込みようであるが、しかもこれがワイマール会議最高の出席者数であって、31年、32年の会議への出席が更に少なくなっている事を考え合わせると、反民主思想と政治的無関心の支配する大学の中でのこの運動の難しさがよくわかる。出席者の内訳は前回同様四つの政党の支持者だけで、期待された国家人民派からの出席はなかった。この会議冒頭にワイマール・サークルの委員長 Kahl は「ワイマール・サークルは国家人民派教官への敵対組織ではなく、大学世界にある不幸な分裂を埋める地盤を作ろうとするものだ」²⁸⁾と von Below の非難に改めてこたえている。この会議の主要議論は、国、州における議会制度を憲法改正によって排除すべきか否かという問題をめぐって行われた。人民党派の Kahl と zu Dohna 伯、および Meinecke は大統領による「代理皇帝制」の方向への改正を、Anschütz, Walter Jellinek, Thoma は議会制統治維持を主張し、大戦中からの議会制支持者と反対者の対立が依然続いていることが明らかになった。結局大会決議では「敗戦と11月革命後の国家新編成は民主制と代議制度の基礎の上でのみ可能であったが、議会機構を実際に運用して行く途中で様々な障害が出て来ており、その克服が急務である。従って憲法改正を避けつつ、より安定した政府を作るのに必要な歩を進めるべく各党の責任感に訴える」²⁹⁾事が満場一致で確認された。こうした力弱い妥協の連続ではあったが、ワイマール・サークルが苦しみながらたとえ内容は骨抜きになっても、とに角民主共和国是認を目指していたのに対して、国家人民系保守派はあくまで民主主義が国民を荒廃させる害毒だとしてその前に立ちはだかり、それに国粋的で、反ユダヤ主義を標榜するネオナショナリズムのグループが合流してますます強大化して行った時代の様相から、ワイマール・サークルのとったその後の方向が容易にうかがえよう。

大学人の政治活動の分裂に橋を渡し、一つにまとめようという動きは、1915年の知識人の請願の時も、1920年のワイマール憲法支持声明の時も、そしてワイマール・サークルの場合も、いずれも穏健派・共和国支持派の側からなされ、いずれも失敗している、というより保守派に問題にされていない。大戦中の知識人の請願の内容が六大経済団体から出された請願とほぼ一致していたという事に端的に見られる様に、また戦後のワイマール憲法支持の知識人と反民主的学者の対立がワイマール連合とドイツ国家人民党の対立関係と深くかかわっていることから分る様にこの分裂はドイツ社会の分裂を背景としており、大学という次元だけで語れる問題でない事は明らかである。しかしそれにしても常に超党派の姿勢を標榜し、全ゆる社会的利害関係の拘束を受けない自由な立場を強調する大学人の中に社会の分裂とは異なった、あるいは社会の分裂を調停する様な動きが全然出て来なかったのは何故かという問題は検討に値しよう。ワイマール・サークルの「党派を超越した国家支持の信念に基づいて国民的調和を大学の中から生じさせよう」という呼びかけを ³⁰⁾ Sontheimer は非現実的なものと評している。確かにこの呼びかけが反民主派の陣営にとどかず、空しかったという歴史的事実から考えれば、この運動は非現実的だったと言う事が出来よう。しかし当時のワイマール・サークルの人々が自分達の活動を初めから非現実的なものだと考えていなかった事も事実である。彼等にとって保守派とのへだたりは今日我々が考える程遠くなかったのではなかろうか。分裂は勿論深刻に受けとめられていたには違いないが、今日程絶望的に、解消不可能には思われていなかったに違いない。大学人の分裂の過程を述べる中で屢々指摘した穏健派・共和国支持派の中にある君主主義的体質からこれは十分に考えられることである。彼等にとっては社会に常に反抗、不満の気分が充満し、それが絶えず国家を根底からゆさぶり続けていること、大学教師の大半がそういう考え方で学生を指導し、将来社会のリーダーになる若い人々に反国家的な考えを植えつけて社会に送り出し、ますますその傾向を助長している状態が最も深刻な問題であった。だからこそ彼等は党派を越えた国家支持を呼びかけずにはいらなかったのである。そしてこれは決して衝動的な行為ではなく、同じく君主制になじみ、君主制への未練が残っている自分達に、現状を救うには結局共和国支持しかないという情勢に対する認識力、理性的な判断力があるのだから、反民主派の人々もそれを理解するに違いないという彼等の計算に基づいていた筈である。国家に対する考え方のあいまいさや議会制民主主義理解に不足があったにしても彼等の行為は高く評価されるべきである。ところが反民主派の教授達にはその情勢に対する理性的な判断力が欠けていた。彼等は、自分達がその中で生れ、育ったブルジョア階級を没落させ、帝政時代に与えられていた特権的身分を失わせたのが民主主義だと考え、議会民主制を諸悪の根源だとするルサンチマンにふりまわされた。Eschenburg の「もし彼等が専門領域での研究活動の際と同じだけの知性と徹底性と周到さで自分達の政治姿勢を検討していたら、政治問題でちがった結論に到達したかも知れない」³¹⁾ という言葉は彼等が政治問題を如何に感情的に考えていたかを示している。彼等のこの感情的姿勢と政治問題と取り組もうとさえしなかった

一般大学教官の政治的事態の深刻さに対する認識のあまさがワイマール・サークルの運動を非現実なものにしたと言えよう。

知識人の請願、無制限潜水盤作戦支持表明、平和決議声明など既に大戦中から見られる様に、併合派、保守派の反応は常に早く、力強く、穏健派・共和国支持派の活動は、大抵保守派への動きへの抵抗という形をとって、後手にまわり、時にはためらい勝ちですらある。これは前者が結びついていた大企業・大農場主等にとっては諸事件が直接自分達の利害につながる所以で反応が早く、それに触発されたし、また彼等全体が政治的に帝政支持・議会民主制反対という徹底した一元的姿勢でまとまっていたのに対して、後者がほとんど知識人だけの理念の団体であり、しかもその中での政治的見解が屢々まとまりにくかった為と思われる。保守派の優勢を破ることが出来なかった原因として最後に保守派大学人が大きな社会勢力と結びついて圧倒的な力を誇っており、世論の支持も抵抗なく得やすく、また大学の中でも一般教官に保守派の動きに引きずられ勝ちな体質が強かった事をあげると共に、この穏健派・憲法支持派の反応の遅さを指摘しておきたい。Sontheimer が「ワイマール共和国の中の反民主思想」を書いて以来、保守派は屢々反民主派と呼ばれるようになり、それに対して反対側の陣営はほとんど反射的に民主派と考えられ勝ちであるが、穏健派・憲法支持派をこの名称で呼ぶ事が出来ないのはこれまで見て来た通りである。穏健派・理性の共和主義者内部での併合問題や議会制民主主義のあり方をめぐる意見の不一致、それに加えて理性の共和主義者と Radbruch 等真の民主主義者の意見の対立が絶対的多数である反民主派の重圧をはね返して、敢然とした行動に出られなかった見逃せない原因の一つである。

- 1) Eschenburg, Theodor : “Aus dem Universitätsleben vor 1933” in “Deutsches Geistesleben und Nationalsozialismus”, Tübingen 1965 S. 34f und S. 39
- 2) Sontheimer, Kurt : “Thomas Mann und die Deutschen”, Hamburg 1965 S. 24
- 3) Döring, Herbert : “Der Weimarer Kreis”, Meisenheim am Glan 1975 S. 25
- 4) Schwabe, Klaus : “Die deutschen Professoren und der alldeutsche Annexionismus 1914/15” in VfZG 1966 S. 131ff
- 5) Rosenberg, Arthur: “Entstehung der Weimarer Republik”, Frankfurt a.M. 1961 S. 147
- 6) Döring, Herbert : A.a.O.S. 47f
- 7) Döring, Herbert : A.a.O.S.53
- 8) Döring, Herbert : A.a.O.S.59
- 9) Döring, Herbert : A.a.O.S.64
- 10) Sontheimer, Kurt : “Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik”, München 1962 S.29ff
- 11) Döring, Herbert : A.a.O.S.65f
- 12) Erdmann, Karl Dietrich: “Die Zeit der Weltkriege” in Handbuch der deutschen Geschichte (Gebhardt), Band 4 1973 S.289 他にS. 212 も参照。
- 13) Döring, Herbert : A.a.O.S.72f
- 14) Eschenburg, Theodor : A.a.O.S.33ff
- 15) Döring, Herbert : A.a.O.S.73f
- 16) Sontheimer, Kurt : “Antidemokratisches Denken”, S.34 f
- 17) Rosenberg, Arthur : “Geschichte der Weimarer Republik”, Frankfurt a.M. 1961 S. 171
- 18) Döring, Herbert : A.a.O.S.79f
- 19) Döring, Herbert : A.a.O.S.81f
- 20) Döring, Herbert : A.a.O.S.55f
- 21) Döring, Herbert : A.a.O.S.69
- 22) Eschenburg, Theodor : A.a.O.S.55f
- 23) Döring, Herbert : A.a.O.S.84ff
- 24) Sontheimer, Kurt : “Die Haltung der deutschen Universitäten zur Weimarer Republik” in “Nationalsozialismus und die deutsche Universität”, Berlin 1966 S.25f
- 25) Döring, Herbert : A.a.O.S.91
- 26) Döring, Herbert : A.a.O.S.95
- 27) Döring, Herbert : A.a.O.S.96
- 28) Döring, Herbert : A.a.O.S.98
- 29) Döring, Herbert : A.a.O.S.99
- 30) Sontheimer, Kurt : “Die Haltung der deutschen Universitäten”, S.26
- 31) Eschenburg, Theodor : A.a.O.S.39